論文

歌ことばとしての「心の闇」

佐藤雅代[1)]

キーワード：歌ことば、心の闇、引歌、勅撰集、私家集、伊勢物語、大和物語、源氏物語、在原業平、藤原兼輔

はじめに

「心の闇」という言葉は、現代社会においては、常人の理解を超えた不可解で「不気味な」犯罪などを形容する際にも用いられる。一方、日本の古典文学では、愛情ゆえの迷妄を表現するが、人々の深い共感を喚起する言葉として機能しており、日本人の精神的な基底とも言うべき表現であった。

ところで、辞書類では、「心の闇」という語はどのように定義されているのだろうか。まず『日本国語大辞典』第二版（小学館）の説明を引用する。

①煩悩に迷う心を闇にたとえていう。思い惑って理非の分別を失うこと。迷妄の心。
②子に対する愛から理性を失って迷う親心をいう。子ゆえの闇。

次に『角川古語大辞典』から引用してみる。

分別を見失った心を闇に見立てて言う語。物事の判断ができないこと。是非善悪の分別に迷うこと。特に子どもを盲目的に愛する親心や、煩悩・妄執など、仏教的な迷いにいうことが多い。

『王朝語辞典』（東京大学出版会）の「こころ」の項には、以下の説明が見える。

「心の闇」には二つの用法がある。一つは、「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ」（伊勢・六九段）を原拠として、煩悩に迷う心を闇にたとえたもの。もう一つは、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（後撰・雑一・藤原兼輔・一一〇二）を原拠として、子への愛執に迷う親心をいう。

また、『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店）では、「心の闇」を①

1) 山陽学園大学総合人間学部　言語文化学科

子を思う親心、②盲目の恋心、③仏教的煩悩の迷妄の三つに分類している。

以上のことから、古典文学作品における「心の闇」は、分別を見失った心を闇に見立てて言う語で、物事の判断ができないことや、是非善悪の分別に迷うことが原義であり、「歌ことば」としては、「煩悩に迷う心」を盲目の恋心と、仏教的煩悩に分け、それとは別に「子を思う親心」に大別されていることが知られる。本稿では、「心の闇」の表現史を辿り、「歌ことば」としての一面を考察する。

一、八代集における「心の闇」

「心の闇」は『万葉集』には見えず、和歌表現においては、以下に引用する『古今和歌集』の業平歌が早い例である。

業平朝臣の伊勢の国にまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかに逢ひて、またの朝に、人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける

君やこし我やゆきけむ思ほえず夢かうつつか寝てか覚めてか

（古今・恋三・六四五・よみ人知らず）[1]

返し

①かきくらす心の闇にまよひにき夢うつつとは世人さだめよ

（古今・恋三・六四六・業平）

この贈答歌は『伊勢物語』六十九段にも見え、①の歌には、第三句「まどひにき」、第五句「今宵さだめよ」と異同がある。業平歌の「心の闇」は、恋情のために理性や分別を失った心の状態を比喩的に表現したものであるが、八代集において「心の闇」は、どのように詠まれているのだろうか。

筑紫に下り侍りけるに、明石といふ所にてよみ侍りける

②物を思ふ心の闇し暗ければあかしの浦もかひなかりけり

（後拾遺・羇旅・五二九・藤原伊周）

殿上申しけるころせざりければよめる

③思ひきや雲ゐの月をよそに見て心の闇にまどふべしとは

（金葉二度本・雑上・五七一・平忠盛）

（題不知）

④君恋ふる心の闇をわびつゝはこの世ばかりと思はましかば

（千載・恋五・九二五・二条院讃岐）

（建仁元年三月歌合に、遇不遇恋の心を）

⑤あはれなる心の闇のゆかりとも見し夜の夢をたれかさだめん

（新古今・恋四・一三〇〇・藤原公経）

②の歌は、太宰権帥として左遷され、筑紫へ下向する伊周が、地名「明石」の掛詞「明し」と対比させ、物思いに沈む心を、闇に閉ざされたように暗いと表現している。③の歌は、殿上という望みが叶わず、心が晴れない状態を「心の闇」としている。④の歌は、相手を恋い慕う妄執を「心の闇」と捉え、それがこの世だけでなく、未来永劫に続くことへの恐れを詠んでいる。⑤の歌は、業平の歌の本歌取であり、恋心のために理非の判断もつかなくなっている状態

を「心の闇」としている。

八代集における「心の闇」の用例は、以上の五首であるが、「子を思う親心」を詠んだ例はなく、恋心ゆえの「闇」は①④⑤の三首、②③の二首は、人間が心の内に抱える不安や挫折や絶望といった負の感情を「心の闇」と表現しているのである。

ところで、「心は闇」と表現する例歌が『後撰和歌集』に一首見える。

太政大臣の、左大将にて、相撲の還饗し侍ける日、中将にてまかりて、事終りて、これかれまかりあかれけるに、やむごとなき人二三人ばかりとどめて、客人、主、酒あまたゝびの後、酔にのりて、子どもの上など申しけるついでに

⑥人の親の心の闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

（後撰・雑一・一一〇二・藤原兼輔）

太政大臣とは、藤原忠平のことで、彼が左大将だった時、相撲の還饗後の二次会のような打ち解けた場で、客も主人もしたたかに酔い、やがて話題が子どものことになり、この歌を詠んだという。詞書から、父親の子煩悩ぶりを発揮した歌となっていることが知られるのである。

作者の藤原兼輔は、紫式部の曾祖父で、当該歌は『源氏物語』の中で、最も多く（二十六回）引歌として用いられている。[2]

また、この歌は『大和物語』四十五段にも見え、『後撰和歌集』とは異なる詠歌事情を伝えている。

堤の中納言の君、十三のみこの母御息所を、内に奉りたまひけるはじめに、帝はいかがおぼしますらむなど、いとかしこく思ひなげきたまひけり。さて、帝によみて奉りたまひける。

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

先帝、いとあはれにおぼしめしたりけり。御返しありけれど、人え知らず。[3]

（大和物語・四十五段）

「帝」は醍醐天皇、「十三のみこ」は醍醐天皇の第十三皇子章明親王、「十三のみこの母御息所」とは、醍醐天皇の更衣であった兼輔の娘、桑子のことである。宮仕えして間もない娘が、帝の寵愛を得ることができるのか案じて、帝に奉って詠んだ歌、という具体的な設定になっている。このことから、『後撰和歌集』よりも切実な父親の迷妄ぶりを読み解くことができるのではないだろうか。

この歌の解釈について、緑川眞知子氏は次のように指摘する。

上の句では、「理性を失った状態」が「闇」で譬えられ、「人の親は理性を失っている訳ではないが」と解釈できる。しかし、この理性を失う状態は下の句では「道にまどう」事に譬えられている。この二つの異なった隠喩の存在が上の句から下の句への論理的、合理的解釈を拒否する。が、まさにそこに一首の詩的効果があると思われる。[4]

子を思う親の情は「闇にあらねども」、つまり物事の判断ができないとか、是非善悪の分別に迷うことはなく、道理は分かっているのだが、それでも子どものこととなると、まるで闇の中で迷うように理性を失ってしまうという解釈が成り立つのである。

二、十三代集における「心の闇」

ところで、八代集以降の勅撰集において、「心の闇」「心は闇」の表現史はどのように展開するのであろうか。十三代集における用例数と部立を以下に示す。

『新勅撰和歌集』（1）雑歌一首
『続後撰和歌集』（2）雑歌二首
『続古今和歌集』（2）雑歌二首
『続拾遺和歌集』（1）釈教歌一首
『新後撰和歌集』（2）釈教歌一首・雑歌一首
『玉葉和歌集』（2）釈教歌二首
『続千載和歌集』（2）釈教歌一首・雑歌一首
『続後拾遺和歌集』（1）釈教歌一首
『風雅和歌集』（1）雑歌一首
『新千載和歌集』（2）雑歌二首
『新拾遺和歌集』（1）釈教歌一首
『新後拾遺和歌集』（0）
『新続古今和歌集』（5）釈教歌三首・哀傷歌一首・雑歌一首

十三代集において、「心の闇」という表現は二十二首見られるが、「心は闇」という表現はない。部立別に見ると、雑歌十一首、釈教歌十首、哀傷歌一首で、恋歌に詠まれることはなかった。また、「心の闇」が親の側から「子を思う心」として詠まれた例は次の四首である。

定家、少将になり侍りて、月あかき夜、よろこび申し侍りけるを見侍りて、あしたにつかはしける
①みかさ山みちふみそめし月かげにいまぞ心の闇は晴れぬる
（新勅撰・雑二・一一五九・藤原定家母）

題不知
②たらちねの心の闇を知るものは子を思ふ時の涙なりけり
（続古今・雑下・一七六九・藤原基良）

元亨三年八月十五夜月五十首歌に、雑月
③月見てもなぐさみなましなぞもかく心の闇に子を思ふらん
（新千載・雑中・一九六二・藤原経継）

おなじ品の心を
④迷ひこし心の闇をしるべにて子を思ふ道に月を見るかな
（新続古今・釈教・八六六・権律師玄覚）

①の歌は、息子定家の昇進を聞いた母が、その喜びを「心の闇」が晴れるようだと表現している。②の歌は、煩悩に迷う心を知るのは、親が子を思う時の涙だ、という意味である。③の歌は、月を見ても心が慰められることがないのは、子を思うゆえの親心の迷妄であろうと詠んでいる。④の歌の詞書の「おなじ品」とは「厳王品」のことで、子を思って迷妄する心のしるべとして月を見ることだ、と解釈できる。

十三代集の「心の闇」は、釈教歌に限らず、雑歌でも十一首の中、九首までが「法の灯」や「悟りの月」といった仏教的な境地と結び

つく言葉を詠み込み、「出家」の決意や「述懐心」などの題詠で詠まれていた。そのような中で、次の三首には、八代集には見られなかった「心の闇」の特徴がある。

母のみまかりて七日にあたりける日、法華経かき供養し侍るとて

⑤子を思ふ心の闇を照らすとてけふかかげつる法の灯火

（玉葉・釈教・二六七二・藤原実経女）

惟宗光庭大内記になされて侍りける比、権大納言公明家にて歌よみ侍りける

⑥君が代に心の闇のはれ行くや窓の蛍の光なるらむ

（新千載・雑上・一七四八・惟宗光吉）

嘆く事侍りけるにながあめすこしはれまある比よめる

⑦五月雨の空もかぎりはあるものを心の闇のはるるまぞなき

（新続古今・哀傷・一五六五・藤原顕頼）

⑤の歌は、詞書に「母のみまかりて七日にあたりける日」とあり、子から親への思いを詠んだ歌であることが知られる。亡くなった母親が、子を思うゆえに迷妄していることを案じ、その闇を照らすように灯明をかかげたと解釈できる。「心の闇」が「子を思う親心」の象徴として捉えられ、それが親の側からではなく、子の側から詠まれていることは注意されて良いだろう。

⑥の歌は、詞書から惟宗光庭が大内記の職務に就いている頃に、権大納言公明の家で詠まれたことが知られる。作者の光吉は、君が代に「心の闇」が晴れると詠み、それは蛍の光のようだと譬えている。「心の闇」に迷う苦悩や不安を詠むのではなく、闇を照らす存在を詠んでいる点に特徴が見られる。

⑦の歌は、十三代集の中で、唯一、哀傷歌として詠まれた例である。五月雨の時節でも長雨は止み、晴れる時もあるのに、自分は亡くなった人を思い、悲しみのために「心の闇」は晴れる時がない、と解釈できるだろう。亡き人への思いに囚われる感情は、出口の見えない、まさに「闇」であり、自分ではコントロールできない「心」である。

三、『源氏物語』以前の私家集における「心の闇」

八代集と十三代集に分けて、勅撰集における「心の闇」を見てきたが、私家集についても検討する。先に『後撰和歌集』の兼輔歌が、『源氏物語』に最も多く引歌として用いられていることを述べた。そこで、「心の闇」「心は闇」の語を含んだ歌を『新編国歌大観』CD－ROM版で検索し、『源氏物語』以前に詠まれたと推察される歌を整理してみる。「心の闇」を詠んだ『古今和歌集』の業平歌は、『業平集』[5]では詞書に「をとこ、いたくないて返し」とあり、「心は闇」を詠んだ『後撰和歌集』の兼輔歌は、『兼輔集』では詞書に「子のかなしきなど人のいふところにて」として見えるが、ここではそれらを除く歌を引用する。

①あづまのみちも　みえざりき　心のやみに　まどひつつ　あふさか山を　こえいでて…

（忠岑集・八四）

しのびてくだり給ふ、なをとて、女御殿
鈴鹿山ふるのなか道きみよりも聞きならすこそ遅れがたけ
（斎宮女御集・一三〇）

御かへり、いせより
②鈴鹿山おとに聞きけるきみよりも心の闇にまどひにしかな
（斎宮女御集・一三一）

いひおこせたり
③おろかなる心の闇にまどひつつうき世にめぐる我が身つらしな
（増基法師集・一六）

④かきくらす心の闇にまどひつつ憂しと見る世にふるぞわびしき
（好忠集・四二五）

⑤月みれど心の闇にまどふかな山のあなたやわが身なるらん
（大弐高遠集・三五五）

ゑに、もののけつきたる女のみにくきかたかきたる後ろに、鬼になりたるもとの妻を、小法師のしばりたるかたかきて、をとこは経よみて、もののけせめたるところを見て
なき人にかごとはかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ
（紫式部集・四四）

返し
⑥ことわりや君が心の闇なれば鬼のかげとはしるく見ゆらむ
（紫式部集・四五）

授学無学人記品
世尊慧灯明、我聞授記音、心歓喜充満、如甘露見灌
⑦あきらけき法の灯なかりせば心の闇のいかではれまし
（発心和歌集・三三）

同じ女御の御母うへうせ給へるに、院より
すみぞめの衣になりし人ゆゑにほひも闇にまどふころかな
（冷泉院御集・五）

御返し
⑧墨染の心の闇になりしよりにほへる春の花も知られず
（冷泉院御集・六）

①～⑧の中で、仏教的煩悩による自らの心の迷妄を詠んだと言えるのは、③⑤⑦の歌である。

①の長歌は、遠国に赴任しなければならない不安と嘆きを「心の闇」で表現し、④の歌は、上の句で『古今和歌集』の業平の恋歌を彷彿させ、下の句ではそれが「沈淪の嘆き」へと一転している。①④いずれの歌も仏教的煩悩の迷妄というより、落胆や絶望で閉ざされた心を「闇」と捉えているのである。

⑥の歌は、贈歌の「心の鬼」に呼応する形で「心の闇」が詠まれており、この「闇」は自分の心の闇ではなく、相手の心の内に見えた「闇」である。

⑧の歌は、贈歌の詞書から、母を亡くした娘の悲しみを詠んだ歌であることが知られる。「子を思う親心」ではなく、「亡き親を思う子の心」であるが、これは親に限らず、愛する人を亡くした者に共通する深い悲しみの「闇」に他ならないだろう。

以上、②を除く歌の「心の闇」について見てきた。②の歌は、諸本で詞書・本文に異同があり、解釈が難しい歌であるが、「女御殿」とは冷泉天皇女御怨子（師輔六女）で、「しのびて下り給ふ」とは、斎宮女御徽子女王が、斎宮として伊勢に下向する娘の規子内親王に付き従って行ったことを指すという指摘がある。[6] この指摘に従えば、怨子が「色々と聞かされていることの多い私の方が、斎宮様につき従って参りたい気持ちです」と詠んできたのに対して、徽子女王は「噂に聞くだけのあなたよりも当事者である私は、子を思う心の闇に惑って伊勢までついてきたのです」と返歌したことになる。

『源氏物語』以前に詠まれたと推察される歌の中で、「心の闇」が「盲目の恋」を表現した例は、業平歌以外には見当たらない。一方、「心の闇」が「子を思う親心」を表す例は、兼輔歌以外では、『斎宮女御集』の例が挙げられるのみである。この徽子女王の歌が、兼輔歌を念頭に置いて詠まれた可能性について、妹尾好信氏は次のように述べている。

> 徽子女王は、特に兼輔歌を念頭に置いて詠んだわけではなく、当時、深い悲しみによる心の乱れや迷いを表す成語として使われていた「心の闇」の語を用いて、斎宮として伊勢に下る一人娘の身の上を思い、離れがたく思うがゆえの心の乱れを「心の闇」と表現しただけなのではないだろうか。[7]

『源氏物語』以前の私家集において、「心の闇」という「歌ことば」が、「盲目の恋心」や「子を思う親心」として詠まれた例は意外に少ない。調査した用例を見る限り、落胆や絶望で閉ざされた心や、愛する人を亡くした悲しみ、愛する者を案じるがあまり、自分の心をコントロールできない苦悩全般を「心の闇」として表現する傾向が認められる。これは、先の妹尾氏の指摘とも一致すると言えるだろう。

四、『源氏物語』以後の私家集における「心の闇」

次に、『源氏物語』以後の中古・中世の私家集で詠まれた「心の闇」について、整理しておく。

十二月廿日比いとさむきに、むすめにおもしろきふる歌どもかきあつめてとらすとて、さうしのおくにかきつけ侍りし

①むかし人むべもいひけん子を思ふ心の闇はさらとなりけり　（基俊集・一一七）

経家四位して内還昇したりしよろこびに、右兵衛督いひたりし返事に、院の還昇の事申されよといひて申しつかはしし

きみならでたれの人かはみちびかむ子を思ふ闇にまどふわが身を　（重家集・三五四）

返し　武衛

②みちびかむてはおぼえねど子を思ふ心の闇をはれせざらめや　（重家集・三五五）

少将きむつなみまかりにしことをとひ侍るとて、ある女房のもとより

あさましやうき世のつねの夢にだに子はたぐふべきなげきならじを
（林下集・二八三）

返し

③限りなき心の闇の夢のうちをおどろかすにぞまたまどひぬる
（林下集・二八四）

ためもとの朝臣むすめにおくれて、はてのわざいとなみける日いひやりける

めぐりくるけふのあはれはわかれにしそのゆふぐれにおとりしもせじ
（唯心房集・一三八）

返し

④思はずにわかれしくれのめぐりきて心の闇もかはりやはする
（唯心房集・一三九）

月

⑤夜もすがら月をみがほにもてなして心の闇にまよふ比かな
（山家集・六四〇）

今比三界皆是我有其衆生悉是吾子の心をよめる

⑥子を思ふ道こそ聞けばうれしけれ心の闇もさとりはるなり
（長秋詠藻・四五七）

月五十首

⑦うきよいとふ心の闇のしるべかなわが思ふかたに有明の月
（秋篠月清集・九一）

心経

⑧むなしさをみよの仏のははならば心の闇を空にはるけよ
（拾遺愚草・二九五六）

皇后宮の女房もろともに大井川のもみぢ見にまかり侍りしに、三位の中将にはかにさはる事ありてとどまりたりしかばいひつかはし侍りし

⑨もろともに君と見ぬまのもみぢばは心の闇のにしきなりけり
（実国集・二六）

縫殿頭貞重、子息長貞におくれて侍りし八月十五夜に、月影のはるるこよひもわが袖の同じ涙になどくもるらん、と人に申して侍りし返しに

⑩よそまでも涙にくもる月影に心の闇を思ひこそやれ
（草庵集・一三五八）

『源氏物語』成立後に詠まれた歌の中で、「心の闇」が「盲目の恋」を象徴する例は一首もない。

「子を思う親心」に特化される形で「心の闇」が詠まれた例は、①②の二首である。

①の歌は、詞書から父親の娘に対する情愛を詠んでいることが知られる。しかし、基俊自身に娘の身を案じる何か特別な事情がある訳ではなく、昔の人が詠んだ古い歌の中に、子を思う親の情愛を「心の闇」とした歌があることに、しみじみとした感慨を覚え、それを娘に伝えようとする親心なのである。

②の歌は、詞書に藤原重家の長男経家の「四位して内還昇したり

しよろこびに、右兵衛督いひたりし返事に…」とある、重家からの贈歌（三五四）に対する、武衛の返歌（三五五）である。重家の家「子を思ふ闇」、武衛の「子を思ふ心の闇」は、いずれも経家の栄達を願う親心である。「心の闇」という言葉が、経家の親である重家でなく、武衛の歌に用いられていることは注意されて良い。

③の歌は、徳大寺実定が息子公綱の死に際し、ある女房からの弔慰に対する返歌である。「子を思う親心」というより、愛する者を亡くした、果てしなく深い悲しみを「心の闇」と表現している。

④の歌は、知人の娘の法要に際し、寂然が贈った歌に対する返歌である。思いがけず亡くなった娘を思う悲しみの「心の闇」は、時が過ぎても決して変わることがない、と詠んでいる。

③④に共通するのは、子どもに先立たれた親の悲しみが、行き場のない、出口の見えない「闇」として心に巣くっている状態であろう。

⑤⑥⑦⑧の四首は、新古今歌人たちの詠歌であるが、「心の闇」は、仏教的煩悩による迷妄であり、それと対峙するために経典の思想内容を詠み込んだり、迷妄する心のしるべとして月を詠んだりしている。

⑨の歌に詠まれた「心の闇」は、「盲目の恋心」でも「子を思う親心」でも「仏教的な煩悩による迷妄」でもない。大井川の紅葉を一緒に見に行けなかった三位の中将に実国が贈った歌である。一緒に紅葉を見ることができなかった実国の心を「闇」に譬え、「錦」と見立てた「紅葉」をそれに対比させているのである。

⑩は、鎌倉末から室町期に活躍した頓阿の歌である。息子に先立たれた知人への弔慰を詠み、子を亡くした親の心を慮った表現として「心の闇」が用いられている。③④の歌も子を亡くした親への弔慰に対する返歌で「心の闇」が詠まれていたが、これは、子を亡くした親自身の心の状態であり、他人が子を亡くした親の悲哀を「心の闇」と譬えた表現ではなかったのである。

五、『源氏物語』における「心の闇」

『源氏物語』の中で、最も多く用いられる引歌が、紫式部の曾祖父にあたる藤原兼輔の詠んだ「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」であり、実に二十六回も引歌として用いられていることは先に述べた。その引用箇所については、渡辺徳正氏による示唆に富んだ指摘[8]があり、次のように整理している。

1　ある程度限られた人物達に関して用いられている。特に光源氏自身、及びその近親者達にほぼ限定できる。

2　特に第一部・第二部では、同一人物―桐壺更衣の母北の方、明石入道と明石君、光源氏と藤壺、朱雀院―に関して用いられ、その話題が物語の根幹を形成していて、物語の展開を領導する機能を持つ。

3　第三部は、第一部・二部ほどの統一性が見られず、話題も拡散して単発的である。

4　引用場面の多くが、内容的に子孫の行末、結婚、あるいは死に関するものであり、しかも最初と最後がいずれも娘の死に関するもので、いわば円環構造ともいえるような側面を持っている。

渡辺氏の指摘を参考に、兼輔歌が引歌として用いられた場面を見ていく。最初は桐壺巻で、更衣の母、北の方が娘の死を嘆く以下の場面である。

「くれまどふ心の闇もたへがたき片はしをだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも心のどかにまかでたまへ。（中略）生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、ただ、『この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』とかへすがへす諫めおかれはべりしかば、（中略）よこさまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になむ」

（桐壺巻　三〇～三一頁）[9]

母北の方の心中にある「たへがたき片はし」を形容する形で、兼輔歌は引歌として用いられている。故大納言の遺言の遵守による桐壺更衣の入内とその必然性と、帝の寵愛ゆえに更衣が横死したことに対する恨み言が「片はし」の内容であった。そして、再び同じ引歌を用いて、帝への批判を「親心ゆえの心の乱れ」として収束させているのである。

この場面において、「心の闇」は娘を亡くした親の深い悲しみを表現しているだけでなく、故大納言の遺言の遵守が、親としての「心の闇」であったことを語るものともなっている。[10]

次に注目するべきは、明石巻で、光源氏に赦免の宣旨が下り、いよいよ帰京となり、光源氏、明石入道、明石君の三者で別れを惜しむ場面である。明石入道は、光源氏に次のように語る。

「世をうみにここらしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね
心の闇はいとどまどひぬべくはべれば、境までだに」と聞こえて、「すきずきしさまなれど、思し出でさせたまふをりはべらば」など、御気色たまはる。

（明石巻　二六九頁）

明石入道の「思し出でさせたまふをりはべらば」は、娘の将来を思い惑う親心であり、それを光源氏に訴える文脈の中で「心の闇」が用いられている。明石入道のこの思いは、若菜上巻で、娘の明石君が詠む次の歌によっても確認される。

世をすてて明石の浦にすむ人も心の闇ははるけしもせじ

（若菜上巻　一〇八頁）

娘の将来を案じ、心乱れる父明石入道の親心について、娘の側から父の「心の闇」を詠んでいるのである。明石入道にとっての「心の闇」は明石一族の子孫の繁栄を切望することに他ならない。明石姫君が今上帝へ入内し、懐妊し、東宮を出産するという物語の展開の中で、明石の君が詠んだこの歌の意義は大きいと言えるだろう。

さて、ここで光源氏が詠んだ歌の「心の闇」についても確認しておきたい。

まして、わりなき御心には、御輿のうちにも思ひやられて、いとど及びなき心地したまふに、すずろはしきまでなむ。
尽きもせぬ心の闇にくるるかな雲居に人を見るにつけても
とのみ、独りごたれつつ、ものいとあはれなり。

（紅葉賀巻　三四八頁）

光源氏の歌について、『全集』[11]の頭注は「心の闇」は「藤壺ゆえの恋の闇路」とし、兼輔歌による「子（冷泉院）ゆえに迷う親心」は一説として挙げている。『新全集』の頭注では「若宮を思う親心闇に、藤壺恋慕ゆえの心の闇が重なる」とある。この指摘は、既に『岷江入楚』でも「つきもせぬとは藤壺の御事、若宮の御事をかけたる詞なるべし」と述べられていた。他方、『新大系』の脚注では「無明の闇、藤壺への愛憐の情」とあり、『大系』『集成』も兼輔歌との関連は述べていない。

藤壺の立后は、東宮の「母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思ぼす」（紅葉賀巻　三四八頁）という桐壺帝の政治的な配慮であったことを考えると、物語上、光源氏に与えられた役割として、若宮への秘めた親心も合わせ持たされていたと言えるのではないだろうか。

しかしながら、「雲居に人を見る」の「人」が、藤壺であることは言うまでもなく、和歌に詠まれた「心の闇」は藤壺恋慕に迷妄する光源氏の心そのものである。そうであるなら、『古今和歌集』『伊勢物語』六十九段の業平歌「かきくらす心の闇にまよひ（まどひ）にき夢うつつとは世人（今宵）さだめよ」も連想されるのではないだろうか。

ところで、『源氏物語』には、光源氏による次のような「心の闇」の用例がある。

殿の、御鏡など見たまひて、忍びて、「中将の朝明の姿はきよげなりな。ただ今はきびはなるべきほどを、かたくなしかならず見ゆるも、心の闇にや」とて、わが御顔は古りがたくよしと見たまふべかめり。（野分巻　二七五頁）

本来は、非常に深刻な「心の闇」という言葉を、光源氏は息子の夕霧に対する冗談に仕立てて、自らの「親ばか」ぶりを自嘲する言葉として使っていることは注意されて良い。光源氏の血を引く唯一の娘であり、「后」になる明石の姫君に対する光源氏の「心の闇」が語られることは一度もなかった。このことから、子を思う親ゆえの「心の闇」に囚われることのない光源氏の姿が浮き彫りにされていると言えるだろう。

先の渡辺氏は、『源氏物語』の「心の闇」について、次のように述べている。

確かに個々の場面にはその場面なりの、「心の闇」に「まどふ」人々の嘆き、あるいは迷いといった「親心ゆえの心の乱れ」が効果的に文脈の中に盛り込まれている。だが、それは兼輔歌「心の闇」が持つ主題性の一部分にすぎないのであろう。[12]

渡辺氏の指摘するように、紫式部は、『源氏物語』という作品の全体構造の中で、兼輔歌成立の歴史的背景をも巧みに利用したことは確かであろう。一方、「歌ことば」のレベルにおいては、「子を思う親心」という兼輔歌の主題を定着させるとともに、その主題を多彩に詠み換え、「心の闇」という「歌ことば」の新たな表現を可能にしたと言えるのではないだろうか。

まとめ

以上の考察に基づき、歌ことばとしての「心の闇」について整理してみる。

「心の闇」は、『古今和歌集』『伊勢物語』の業平歌を嚆矢とし、恋の迷妄を意味する「歌ことば」として用いられていた。しかし、業平歌以降、「心の闇」が「盲目の恋」を詠んだ「歌ことば」として用いられることは意外に少なく、八代集に二例を数えるに過ぎなかった。

他方、『後撰和歌集』『大和物語』に見える兼輔歌は、『古今和歌六帖』の「おや」の項目にも挙げられており、「子を思う親心」を詠んだ歌として、当時既に周知されていたようである。それが『源氏物語』の引歌として、繰り返し用いられたことで、「心の闇」という表現は「子を思う親心」を意味する「歌ことば」として、さらに定着したと言える。

「心の闇」は、釈教歌で用いられることから知られるように、仏教的煩悩による迷妄を表すことが多い。その一方で、日常的な場における失意や落胆、悲しみや絶望といった自分ではコントロールできない感情を表す「歌ことば」としても多く用いられていたことは注意されて良い。

また、平安後期になると、人の死に際し、弔慰を表す贈答歌で用いられるようになっていく。これは、愛する人の死を受け止めかねる心情の発露として「心の闇」が選ばれ、人々の共感を喚起する「歌ことば」として機能していたことに他ならないだろう。

ここで、改めて兼輔歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」について考えてみたい。

『後撰和歌集』と『大和物語』では、詠歌事情の異なることは先に述べた。前者の詞書では、うちとけた酒席で、つい子煩悩ぶりを発揮した父親が娘への情愛を込めて詠んだ歌となっていたが、後者では、娘桑子を入内させて間もない父兼輔が、帝の寵愛のいかなるかを案じて詠んだ歌として語られる。実際、兼輔は従三位中納言まで昇り、娘桑子は帝の寵愛を得て、章明親王が生まれている。当該歌について、津島昭宏氏は次のように述べている。

やはり歌自体は、具体性を持たぬ観念的な歌だと言わねばなるまい。しかし、そうであるがゆえに、汚濁にまみれた我が身ではなく、それを歌う者も読む者も「心の闇」と「子を思ふ道」すなわち親の無償の愛というものにどっぷりと身を委ねたくなるのかも知れない。この歌が子を思う詠歌として広く知られ、物語の中で多く、引歌とされるのも、そうした純粋な親子愛を夢想するところに起因しよう。[13]

兼輔歌を引用することで、子どもに対する親の純粋な情愛を表現することはもちろん、親の世俗的、政略的な思惑さえも、子を思う親の盲目的な愛に引き上げていくことができるという、津島氏の指摘は興味深い。

また、『源氏物語』と兼輔歌の関係については、先の妹尾氏に次のような指摘がある。

紫式部は極めて意図的に「心の闇」の語を兼輔歌の引歌表現にのみ用いている。それまでは、業平の「かきくらす…」の歌を代表として激しい悲しみや心の乱れ・迷いを表す語であった「心の闇」を子を思う盲目の親心の意に特化して用いて、実に印象的な歌語として再生せしめたのであった。[14]

紫式部が、「心の闇」という「歌語」を再生せしめたという妹尾

氏の指摘はもっともであるが、「心の闇」が「子を思う親心」を表現する「歌ことば」として定着した理由には、兼輔歌が詠歌事情に頼ることなく、三十一文字として完結した世界を持ち、それだけで自立していたことも考慮されるべきではないだろうか。

他方、「心の闇」という歌ことばの嚆矢となった『古今和歌集』『伊勢物語』の業平歌「かきくらす心の闇にまよひ（まどひ）にき夢うつつとは世人（今宵）さだめよ」は、詠歌事情から切り離されることなく享受されていった。だからこそ、「歌ことば」としての「心の闇」は、恋に迷妄する意味で詠まれることが極めて少なかったのではないだろうか。

注

（1）和歌の引用は、『新編国歌大観』（角川書店）により、歌番号も同書による。ただし、適宜漢字表記に改めた箇所がある。

（2）伊井春樹編『源氏物語引歌索引』（笠間書院　昭和五三年）による。紫式部が『源氏物語』の中で兼輔歌を最も多く引用したこと、兼輔だけでなく、その子孫達の歌も物語中に引用していることについて、伊井春樹氏は、以下のように述べている。

彼女が曾祖父兼輔を頂点とする一族の歌をしばしば用いたのは、家の自覚とその系譜につながる一人であることを意識した結果によるのであろうと思う。

（『むらさき』第一七輯　昭和五五年七月。のち『源氏物語論考』風間書房　昭和五六年　所収）

（3）『大和物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）による。

（4）緑川眞知子「源氏物語におけるトポスの確立と変容―「闇」の語をめぐって―（『源氏物語と平安文学　第四集』早稲田大学出版部　平成七年）

（5）『新編国歌大観』第三巻所収の『業平集』による。第七巻所収の『業平集』の詞書では「そのかへし」とある。

（6）平安文学輪読会著『斎宮女御集注釈』（塙書房　昭和五六年）

（7）妹尾好信「人の親の心は闇か―『源氏物語』最多引歌考―」（『源氏物語の展望』第十輯　三弥井書店　平成二三年）

（8）渡辺徳正「『心の闇』に『まどふ』人々―『源氏物語』の表現構造―」（『國學院大學大學院文学研究科紀要』第二一輯　平成二年三月）

（9）『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）による。

（10）鈴木宏子氏は、源氏物語の「心の闇」について、以下のように述べている。

「心の闇」は単に親心の深さを表す言葉なのではない。『源氏物語』の人々は、この言葉を口にしつつ日常の埒を踏みこえて、自らの情動に身をまかせる。「心の闇」は理性のたががはずれるサインであり、同時に、そのようなあり方を自身にも他者にも認めさせてしまう免罪符なのである。（『むらさき』第四三輯　平成一八年　一二月）

（11）『全集』…日本古典文学全集（小学館）、『新全集』…新編日本古典文学全集（小学館）、『新大系』…新日本古典文学大系（岩波書店）、『大系』…日本古典文学大系（岩波書店）、『集成』…新潮日本古典集成（新潮社）

（12）前掲（注8）渡辺論文による。

（13）津島昭宏「詐術としての『心の闇』（一）」（『相聞』四八号　相聞の会　平成二四年）

（14）前掲（注7）妹尾論文による。

付記　本研究は、山陽学園大学・短期大学の学内研究補助金（平成二十九年度）を受けて追行された。